

なな山緑地の会 10年の歩み



設立までの経緯

多摩市和田、百草団地の付近に開発を免れた雑木林がある。それに隣接した『和田百草園住宅自治会』から多摩市長あて「緑地保全」要望書が提出された。平成13年12月のことである。翌年の10月、多摩市公園緑地課の進藤課長が自治会を訪れ、自治会より提出されていた要望書に対し、報告が遅れ申し訳なかったが、緑地の一部が府中の住崎氏より、多摩市に寄付された。しかし今、市としては財政難で、予算また人材を提供することは困難なので、なんとか自治会を中心にボランティアで管理して欲しいとのことであった。



翌平成15年1月26日、自治会有志で将来のボランティア立ち上げの準備会を開催した。2月には自治会代表が多摩市民環境会議において、改めて緑地のあり方を説明し協力を求めた。2月と3月には、自治会、多摩市環境会議有志で下草刈を行なった。平成15年4月に、森木会第2期生の講習をなな山で行い、自治会の有志もこれに参加した。11月、第2期の講習が終了した際、和田緑地が森木会の活動エリアに加えられ、活動メンバーの募集がなされた。その時点で12名の講座修了生が集まった。平成15年12月、森木会和田班のメンバー8名が活動を開始し、自治会のメンバーも一緒に作業をした。翌年3月まで6回の活動と、会立ち上げの協議を経て、平成16年3月28日、旧竜が峰小学校で「なな山緑地の会」設立総会を開催。平成16年4月1日付けで、「なな山緑地の会」が発足した。

会の規約では、「本会は多摩市和田の通称なな山に残る里山を拠点とし、里山を保全するために管理、運営を実施し、里山の自然に親しみ、会員並びに地域のみなさんとのコミュニケーションを深めていくことを目的とします。」としている。

会員数は、設立時24名であったが、平成23年11月現在48名になっている。

なな山緑地の概要



西の山

住崎氏が多摩市に寄贈した1.07haの雑木林で、コナラが主な樹種。当会発足以来、維持管理のため手入れを続けているので、雑木林の美しい姿が維持され、新緑の頃や紅葉の頃の景観は見事である。林床にはキンラン、ササバギンラン、エビネ、シュンラン、サイハイラン、タマノカンアオイなど希少植物を見ることができる。

中の山



平成19年12月に多摩市が取得し、翌平成20年2月から維持・管理を私たちが担当することになった0.59haの雑木林で、ヒサカキ、シラカシなどの常緑樹を主とする。長い間、人の手が入っていなかったため、倒木・枯損木が至る所にあり、アズマネザサが人の背丈より高く伸びている状況だった。その後、倒木の片付け、枯損木、不整形木の伐倒・片付け、作業用の道作りを行った。また、片付けた跡が大きく開けた山の中心付近に、なな山でドングリから育てたクヌギの苗を植え、皆無事に育っている。山全体としては常緑樹を中心とした雑木林として守っていく方針である。

東の山

平成21年3月に新たに活動エリアとなった0.83ha。ほとんどが落葉広葉樹で、林床は大人の背より高いアズマネザサに覆われ、簡単に人が入り込めない状況になっていた。アズマネザサを1尋の幅に刈り取って作業用の道を作り、植生の調査、倒木の整理などを実施しながら、この雑木林の将来のあり方を探り、管理計画を立案することを目標に活動していく方針である。



西側道路沿い傾斜地（のり面）

約0.2haの傾斜地。以前から投棄されたゴミを拾い、草刈りなど整備をしていたが、平成24年4月より正式に市と協定を結んで保全・管理を担当することになった。近隣住民が気持ちよく通行できるように、これからも管理活動を続けていく方針である。

保全活動の内容

1. 作業用の道作り

最初に取り掛かったのは、作業用の道作りである。倒木を片付け、緑地の入口から山頂まで傾斜地には、階段を設けながら、総延長280mに及ぶ道を作った。作業をする際に通るためや見学者が希少植物を踏まないためのものであるが、決して立派な恒久的なものではなく、両脇に材木を目印に置いただけの素朴なものである。

2. 下草刈り

林床にはアズマネザサが一面に繁茂していたが、これを毎年刈り込んでいるので、徐々に丈が低くなり、今までのような藪にはならなくなり、今まで目にしなかった草本が育ってきている。

3. 希少植物の保護

希少植物の保護に取り組んでいる。雑木林特有の多様な植物が育つ



ている。キンラン、エビネ、ササバギンラン、サイハイラン、シュンラン、タマノカンアオイほか、多くの草本が育っている。そのうち代表的な59種類の美しい花の咲く植物を紹介したパンフレット『なな山の植物Ⅰ』を発刊している。

4. くず(落ち葉)掃き

西の山を中心に、くず(落ち葉)掃きを行っている。集めたくずは堆肥として、観察園の土作りに利用する。排気ガスの影響の少ない里山からの落ち葉は、観察園で循環の実際を観察できる野菜作りに欠かせない。今でも毎年、府中の農業ボランティアの方たちが、なな山の落ち葉を集めて持ち帰り堆肥にしている。現在、1.8m角の落ち葉囲いが10ヵ所にあり、そこに集めて堆肥にしている。作物収穫後、堆肥のすき込みを行っている。



5. 観察園作り

平成15年に西の山の広場の一部を耕して観察園とした、最初は手間のかからないサツマイモを植え収穫したが、徐々に広げてサトイモ、ジャガイモ、ダイコンなどの根菜類だけでなく、カボチャ、ネギ、キャベツ、タマネギなどにレパートリーを広げている。収穫のときは、収穫祭イベントとして芋煮会などを開く。また、近隣住民の賛助会員に、芋などの収穫物をお分けしている。

6. キノコの栽培

間伐材や伐倒材をホダ木とし、シイタケ菌やナメコ菌を打って、キノコの栽培にも取り組んでいる。肉厚でおいしいシイタケが味わえるし、ナメコが見事に大量発生するのを楽しんでいる。



7. 間伐・枝打ち

不要な枯れ木の除去や、林床に陽が入るようにする必要があるときに間伐を行う。また、隣接する住宅から、台風などで倒れたら危険だと伐倒を依頼されたときには、安全のため除伐することがある。また、枝が繁茂しすぎて適当な空間が維持できなくなっている場合などに枝打ちをしている。小面積だが、植林されたスギ、ヒノキの間伐・枝打ちも、もう少し進めていきたい。

8. 小学生の自然観察会



平成18年から毎年多摩第二小学校の子どもたちが、大勢でなな山緑地に遊びに来るようになった。最初は、カブトムシの幼虫の採取やノコギリで丸太切りをするのが主であったが、年を追うごとに遊びのレパートリーが増えてきた。枝や実を使った工作、ハシゴ登り、巣箱作り、落ち葉掃き、落ち葉滑り、落ち葉のプール、ターザンごっこ、オリエンテーション(宝探し)などで、毎年100名前後の子どもたちがやって来て、嬉々として遊びながら、里山の自然を体全体で感じている様子である。またこの自然観察会を主催している「二小おやじの会」のメンバーも童心に帰り子どもたちと一緒に楽しんでいる様子である。こうして雑木林の

なかで楽しく遊ぶことが、里山の大切さを次代、次々代へ伝えていくことに繋がっていることを実感している。

9. 会報の発行

なな山緑地の会の活動をPRするため、また会員相互の理解を深めるため会報「なな山だより」を発行している。平成17年9月に創刊し、年4回の季刊として平成23年までに23号を数えている。諸事情から、今年から、年3回の発行としたが、今後も内容の充実を図りながら続けていく予定。また、会のホームページも開設している。

10. 懇親会の開催

年末などに会員の親睦を深めるため、なな山で収穫した野菜やキノコを使って豚汁や芋煮を作って懇親会を行う。多くの会員が卓を囲んで、一年を顧み、また新しい年への抱負を語りあう機会になっている。

活動実績

当会発足時以来の活動実績は次表のとおりである。

年度(4月～3月)	活動回数(回)	延べ参加人数(名)	備考
H15年(2003年)	6	63	H15年12月から
H16年(2004年)	20	197	
H17年(2005年)	21	236	
H18年(2006年)	24	239	
H19年(2007年)	28	332	
H20年(2008年)	24	396	
H21年(2009年)	22	330	
H22年(2010年)	25	340	
H23年(2011年)	17	252	H23年11月まで

なな山緑地の会のこれから

和田、百草地区は宅地開発が進み、緑が少なくなってきた。貴重な緑を守るため、私たちはこれまで微力を尽くしてきた。さらに新たに活動エリアとなった開発は免れたものの永年放置されてきた雑木林を、整備された里山として復活させるために、植物、小動物、鳥類、昆虫類の生態が豊かな雑木林へと誘導し、それを周辺住民や子どもたちの自然学習の場として提供することに力を尽したい。

これらの活動によって、自然と人間が共生できる雑木林の環境を次世代に継承することができる。私たちは先祖から受け継いだ宝物を、後世に伝えていく中継ランナーのような役目を今、担っている。会員の平均年齢は、決して若いとは言えない状況である。これからは若い会員を増やして、この活動が末永く続けられるよう、さらなる努力をしていきたい。(完)

平成23年12月 著作 なな山緑地の会